

2016年3月5日(土)

重い障がいのある子どものための多職種連携セミナーにいらしたみなさんへ

李 国本 修慈

今回は熊本にやって来れたこと(けっこう来たりしてはいますが^^;)を喜んでいます。熊本と言えば「くまもん」(私、ゆるキャラさんが好きだったりします^^;)ですが、これからは(私的には今も、ですが)「しまもん」(←島津智之さんのこと^^;)が、それに取って変わるのではないかと思えるほどに NEXTEP さんたちの活動のステキさを感じています(少しべんちゃら^^;)。

今日は(も、ですかね^^;)楽しく「連携」なんぞという言葉(実は私、この言葉にあんまり良い印象を持ってなくて、胡散臭いな〜、とか思ったりしています^^;)についてみなさんと考えていければと思っています。

「連携」(多職種だとか)、「ネットワーク」、その他、「包括支援」や「専門性」、更にそれらに関わる(筈であると思えます)「計画相談」や「意思決定支援」(なんぞという文言も法制度の中に記されるこの頃です)なんて言葉の意味等も、ちょこっと考えていければと思います。

して(さて)、「連携」…。様々な場合(場面、ケース等ともいわれます)がありますが、例えば、とある病院からお家に帰る(退院とも言いますね^^;)際にも「治療」から「暮らし(お家での)」に向けての取り組みの転換期だとか、病院を変える(代わる)際の「方針」の違いだとか…。更には最近では「看看連携」等という言葉が有るらしい(ようするに病院と地域との看護師が連携しようということのよう)ですが、病院同士(病院間)でも「?」だったり、お家に帰った後の地域での看護ステーション同士でも「方針」(考え?理念?)がイマイチ違ったり…みたいなことを感じるものが少なくありません。そんな際に、少なくない専門職さんたちは盛んに(たぶん)「連携」という言葉を持って、その方針だとか(等)を統一しようとされるのですが(まだ、そういった動きを見せる方々はマシ=偉そうでスイマセン、…で、双方でいがみ合ったり…大抵は医療志向が生活志向より強いステーションが幅を効かせちゃうことが圧倒的に多いようです@注:私の主観です^^;)、ほんとにそれ(統一した方針を築くこと)が「連携」なのかしら?ということも考えてみたいものです。

私たちの「アジト」※(事業所・事務所等とも言われます)には宏志さんという方が住んでいます。宏志さんは重症心身障害等といわれちゃう方で、言葉ではなかなか自らの思いを伝える(と言いますか、周囲の方々が思いを受け取る)ことが難しいとされる方です。彼がアジトで暮らすきっかけになったのは、よくある(たぶん)親御さんが他界されたコトによるのですが、その際に支援者(ケースワーカー、相談員等といえますね)は心から(たぶん^^;)宏志さんのことを思い手続き(福祉サービス利用の)を進めちゃう訳です。しかもいわゆる「連携(ネットワーク)」を活かした(というらしい^^;)様々な事業所のサービスを選び組み合わせ…。

だけでも、あたりまえに「ちょっと待った」という声が出て、みんなで決して多職種のみではなく、職なんぞを持っていない彼の友だち^^;)にも集まっていた(き)彼の「思い」を

聴く訳です。たぶんこれも「連携」(しかも多職種ではなく、+職無者^^;も含めた)等と言うのかと思うのですが、さすると先に上げた「プラン」(計画)ではなく、できる限り今までと同様に「ここいらで暮らしたい」となる訳で、今に至ったりしています。

まあ、何が言いたいのか?なんです、が、「多職種連携」「ネットワーク」等という言葉を使う際に、当人が何処に居る(おる)のかということをしかり確認(認識)せねばならないのでは…ということなんです。

彼女・彼らが存在せぬ場面での「連携」程、恐ろしいものは無いということも数多く感じてきました。たぶん多くの医療・福祉というコト・モノに関わる方々は善意に満ちた優しい人なんだろうと思う(思いたい?^^;)のですが、決して彼女・彼らは私たちのような支援者に護られて保護されて(のみ)生きていく方々ではなく、自らの力で生きようとされている(と思います)ことをしっかりと認識したいものです。

現在、といいますか、もう随分と以前からだと感じるのですが、福祉基礎構造改革等と言われ法制度が整い、福祉サービスも増え豊かな社会になったという一面もある(まだまだ足りないとしても)ので、それら(使えるとされるサービス)を駆使して(正に連携を活かし)作られたプラン(計画)により、その人の暮らし方(生き方)が決められてしまうことの恐ろしさも(改めて)感じていただければと思ったりしています。

そして私たち支援者という者はこれまでに多くの方々をそれらのモノ(専門性や連携等という言葉)で当人やご家族を苦しめてきたことも自戒せねばならないのではないかとも思ったりしています。「連携」の言葉の中に当人は居る(おる)のか、「居る」ことの意味やその人の(重症児や障害者としてではなく)の存在の価値を明確にした際にこそ初めて「人」に対しての「連携」などという言葉が使えるのかと思ったりもします。

2015年問題や在宅・小児在宅医療等といった言葉が注目を集めるようになってきました。そうした背景で様々な法制度が整備され、そこに向かう支援者という方々も増えてきてはいますが、何より大切にせねばならないことをみなさんと確認したいものです。

私たちは「連携」「ネットワーク」の定義を「その人(の輝き・光・灯り)に群がる虫のような集まり」としていまして、決して「職種(専門の)」のみではない(もちろんそれも大切ですね^^;たぶん^^;)「人としての塊」とも言ったりしています。

なかなかの抽象的な訳の解らないお話しかも知れませんが、ちょこつとでも頷いてもらえたらと願っています。そんなんで本日はありがとうございました。

※ アジト…私たちの法人「有限会社しえあーど」「NPO 法人地域生活を考えよーかい」の事務所と短期入所事業を行っている 2階建ての建物＝「このいけスペース」という名称で主に「宴会」と「研修」を目的としたスペースです。

有限会社しえあーど NPO 法人地域生活を考えよーかい

〒664-0006 兵庫県伊丹市鴻池 5 丁目 11 番 27 号

Mail kunimoto@kangaeyo.com URL <http://www.kangaeyo-kai.net/>

以下に、私が尊敬いたします^^;千葉県柏市「ばおぼぶ」の五十嵐正人さんの言葉(私とのやり取りの中での)を記してみます。ご覧ください。

僕のまわり、千葉県とかそんなあたりの場合、「連携」先にありきが弊害になっている気がします。「連携」は方法のひとつ。目的は障害者と呼ばれてしまう人の幸せや、人間としての(人間らしい、ではなく)生き方の回復なのだろうと思います。しかし、方法の方が目的を凌駕する感じになっていて…。

結果、本人(目的)よりも、支援者(方法)が優位に立ってしまい、まわりの評価は目的に向き合い目的達成の力が高い者ではなく、連携をとる能力の高い者を高評価。

本人が望んでいなくても、あるいは連携しない方がいい場合でも、「支援者みんなで力を合わせて！」みたいな素敵なキャッチフレーズが優先される。

何が言いたいのかというと、連携がうまく行った時には、目的が達成されたか疑ったほうがいい、ということ。連携した支援者達が「お疲れさま！僕達、良い連携が出来たね」と、旨いビールを飲んでいる陰で、そのご本人さんが泣いていたり、社会の管理下であたかも奴隷のような存在に低められたり、そんなことがおきていないか。もっと言うなら、人の人生はとても複雑で、「連携」程度で何とかなるわけがない。むしろ「連携」し続けた場合、それが混乱し、対立し、ぶつかり合い…。っていうぐちゃぐちゃの方が、本人の幸せや、人間としての生き方の実現に近づいているとさえ言える気がします。

だから、国本さんのお悩みは希望に向かってるように思えます。裕子さんや、弓子さん、そして僕自身の人生にしても、たかだか支援者ごときが素敵に「連携」した程度で幸せになれるほど安くはないぜ！みたいな意地はあります。

もしも「連携」というものに多少なりとも意味があるとしたなら、それは直線的な連携ではなく、幅の広がりを持った場合なのだろうと思います。

障害者福祉が措置から契約に変わった時、「サービスを選べるようになる」と、当時のリーダーたちはうさん臭い宣伝をしました。しかしそこで選べたのは、決められた数量の中での選択であり、わたしたちが日常的に日本人として生活しているような選択とは、ほど遠いものでした。そしてもう一つ、障害福祉の選択のうさん臭さは、それが直線的にあることです。「みんなで！」という青春ドラマのような、提供側の美意識が前提となって、会議という支援者側の責任みたいなものをシェアするシステムによって「選択」をさせられます。その時には、「相談支援者さん、日常のトイレや風呂の介助も、すべてあなたにやってほしい」というような選択肢は、あらかじめ削除されているのです。酷い言い方が許されるならば、障害福祉における「選択」というのは、自由な選択ではなく、あらかじめ選択肢が限定されている、いわばカツアゲの場における「殴られるのと金を出すのと、どちらがいい？」という選択と同じなのです。措置から契約への移行というのは、「金を巻き上げられる」という決定事項から「殴られるか、金を出すか」という選択に変わった程度のことなのだとは僕は理解しています。

話がそれてしまいましたが、そして直線的な「連携」の問題点は、その「選択」の非人間性にあります。分かりやすい例としては、長くもめていたグループホームでのヘルパー利用の可否にもうかがえます。「制度を前提とした選択」の大原則（これが非人間的であることの一つの正体なのですが）は、並行して二つの制度を使えないということです。そしてその発展として、一本の道を選択させられるということにあります。

制度を前提とした時には、まったく非人間的な質問に、障害者と呼ばれてしまう人達はさらされているのです。「AとB、どちらを選びますか？」それはどちらかを選ぶまで続けられる拷問のような「選択」です。そしてどちらかを選んだなら、自己責任という爽やかな言葉を添えて、それに向けての「連携」がなされるのです。一つの目標に向かって、直線的に…。

「連携」した人達は、まるで原野に一本の道を造るかのような作業に、時には酔いしれるのでしょう。設計図を作る者、道路を舗装する者。川があったなら橋をかける者。そんな直線的な「連携」をして、その人が自己責任で、一つだけを選ばされた道は作られています。

僕は、この「選択」と「連携」に、吐き気をおぼえます。

だって、僕自身のことを考えたなら、一本の道なんて前には存在していないのですから。歩いた結果が曲がりくねりながら一本になっているだけで、前には、原野が広がっている、あるいは複数の道が常に選ばれるのを待っている状態なのですから。障害者と呼ばれてしまう人達が社会福祉のサービスを使う時に存在する「連携」を、電池の直列だとするなら、本来日本人が普通に生きていて体験している日常は、常に並列に選択肢が待っているような状態です。これが自由な選択なのだと、僕は思っています。

ちゃんとした人には怒られるかもしれませんが、僕は（結婚する前であれば、…本当は結婚していても、なのですが…）人を好きになる時に、二股をかけることかできるくらい自由なのです。Aさんがいいか、Bさんがいいか決めることができないまま、二股を続けていても、その都度結果としてどちらかを選んだ道か後ろにできていくのです。

僕は、この「自由」が許されない、カツアゲのような「選択」を、本当の「選択」ではないと思うし、そうしたうさん臭い「選択」から、裕子さんや弓子さんや、大切な人達と一緒に逃げたいと考えています。

そんなこんなで、直線的に作られる「連携」はスムーズであるほど気持ち悪くなってしまいます。

最近では、制度としての社会福祉という枠の中だけではなく、障害者と呼ばれてしまう人達の日々や、人生そのものが「直線的な選択」によって作られると思いでいる人達や、それが幸せだと勘違いしている人達が、ずいぶん多くなったように思います。

たとえば、裕子さんの前に100人の人が手を差しのべてくれたとしても、その人達が真っ直ぐ一列に直列してバトンか襷を渡すように裕子さんを繋いでいくのなら、とっても嫌です。裕子さんは、支援者とやらの駅伝大会の襷ではないのですから。

100人の人達の中の何人かの手が、常に何本も並列して裕子さんの前に差しのべられているような日々であってほしいと願っています。

裕子さんの前ではなく、後ろに歩いてきた道ができていれば、それでいい。それがいいな、と思う今日このごろです。

- ☆ 「ばおぼぶ」と「生活ホーム小島屋」…障害者総合支援法によらない自由な福祉事業を行いながら先に記した文章に出てきます「裕子さん」「弓子さん」と五十嵐さん・小島さんが暮らすお家の屋号(?^^;)あるいは名称。
- ☆ もうひとつの福祉…五十嵐正人さんが綴る様々なコト・モノをご覧いただくことができます。 <http://mouhitotsunofukushi.seesaa.net/>
- ☆ 裕子ねーんね・弓ちゃんオハヨー…「ばおぼぶ」&「生活ホーム小島屋」の日々をご覧いただけます。 <http://mouhitotsunofukushi.seesaa.net/>
- ☆ 三人暮らし…五十嵐正人さんの書かれた小説。ぜひお読みください。「三人暮らし」「五十嵐正人」で検索ください。
- ☆ ラーの会(重症心身障害児者といわれる方々と共に生きる会)への入会も随時受け付け中です。国本までお問い合わせください。



重症心身障害児者といわれる方々と共に生きる会